

# 介護福祉士養成校における卒業生のニーズ調査（第一報）

## — 「卒業生の交流会」の試み —

### A Survey of Needs for the Graduates from the Caregiver Course of a University

#### — A Trial of a “Exchange Meeting of Graduates” —

高野 晃 伸

Akinobu TAKANO

**抄録：**少子高齢社会を迎えている日本において、厚生労働省の推計によると、2025年には約38万人の介護人材が不足するといわれている。そのため岐阜県下で最も介護福祉士を養成している本学の社会的役割は益々重要となるといえる。しかし、卒業後の教育に対する本学としてのサポートは、毎年3月に実施される「介護体験セミナー」や、本学に随時訪れる卒業生の対応に留まっている。そこで、岐阜県における介護人材確保の一躍を担う取り組みに繋げることを期待し、2015年8月27日（木）に、介護現場に勤務している卒業生を対象とした第一回の「卒業生の集い」を実施し、その場を活用してアンケート調査やグループインタビューを通して卒業生のニーズ調査をおこなった。その結果、「卒業生の集い」の参加者は、卒業年や年齢の違いによって、懐かしい同級生や教員との交流を求める面と、情報交換や教員との意見交換を求める面があることが確認された。これは今回の「卒業生の交流会」の参加者のみのニーズと限定的な意見であるが、今後の同実践を継続していく上で貴重なデータとなった。この結果を踏まえ、介護職に従事している卒業生にとって、養成校である母校が社会資源として役割を担うことで、介護人材確保と共に人材育成の一躍を担うことが期待される。

**キーワード：**卒業生のニーズ、卒後教育、介護福祉士、介護人材育成

## 1. はじめに

少子高齢社会を迎えている日本において、厚生労働省の推計によると、2025年には約38万人の介護人材が不足するといわれている。その中で、介護人材が確保できる都道府県別充足率は、中部9県の中で岐阜県が最も低く82%と試算されている<sup>(1)</sup>。そのため、全国に先駆けて介護福祉士養成に携り、現在でも岐阜県下で最も介護福祉士を多く養成し、介護現場に送り出している中部学院大学・中部学院大学短期大学部（以下、本学）の社会的役割は益々重要となるといえる。

そのため、介護福祉士養成校として、在学中のみならず介護職として勤務する卒業生に対する教育を実践することで、人材育成と共に介護現場で継続して勤務できるようサポートすることが期待される。

そこで介護職として勤務している、本学卒業生を対象とした「卒業生の交流会」を2015年8月27日（木）に初めて実施し、その場を活用して参加者へのアンケートやグループインタビューによるニーズ調査を実施した。

なお、本文では「介護現場」という用語を『介護サービスを提供している福祉施設や福祉事業所』のことと定義する。

## 2. 目 的

介護現場に勤務する本学卒業生を対象とした交流会を通して、卒業生が母校に求めるニーズを把握することである。

## 3. 実践までの経緯

### (1) 実践の背景

これまでに本学で卒後教育と位置づけられる取り組みとして、毎年1回3月に「介護福祉セミナー」の開催があり、近隣地域や福祉職員と共に、卒業生の学びの場としていた。しかし、卒業生の母校に対するニーズは年1回のセミナーでは応えきれないものではない。また、卒業生が個別に本学に来校し、恩師に介護現場の近況報告や

不満や疑問などを話していくことに教員が対応することもあったが、全ての卒業生のニーズに沿った対応が出来ているとは言い難い状況にあった。

#### (2) 実践にむけた準備

「卒業生の交流会」実践にむけて、介護福祉士国家試験対策準備特別委員会の委員で検討し、短期大学部学長をはじめ、介護福祉士資格の養成に携る人間福祉学部長、社会福祉学科学科長、専攻科長の了承を得て準備を進めた。準備の過程では、介護福祉教育に関わる先生方の助言を得ると共に、交流会当日の参加・協力を要請した。

#### (3) 卒業生への呼びかけ方法

以下の流れで「卒業生の交流会」への呼びかけを行った。

3月 卒業礼拝前の学科別集会にて、同年度卒業生にメールアドレス登録を呼びかけた。

4月 大学ホームページ上に「介護現場で活躍している卒業生」ページを開設した。

6月 8月27日(木)に交流会開催を決定し、登録されているメールアドレスに案内を送信した。

7月 キャリア支援センターが把握している過去3年分の卒業生メールアドレスに案内を送信し、岐阜県内95箇所介護福祉施設に案内チラシを郵送した。

呼びかけの結果、21名の卒業生が参加した。参加者の内訳は、人間福祉学部卒者3名、社会福祉学科学科卒者17名、商学科学科卒者1名であった。卒業年次等の文布は図3に示すように2014年度卒者が14名と最も多く、1994年度卒者1名も参加した。

## 4. 実践方法

(1) 対象：現在介護現場に勤務している本学の卒業生で、「第1回 卒業生の交流会」に参加した21名。

(2) 実践日時：2015年8月27日(木) 19:00~20:30(90分間)

(3) 実践場所：本学関キャンパス2110教室

(4) スケジュール：

19:00~19:05 フリートーク

19:05~19:10 開会挨拶、最近の介護動向説明  
社会福祉学科学科長・専攻科長より、介護福祉士資格の取得方法の変更の動向について、事前に用意した厚生労働省の資料を提示して説明をおこなった。

19:10~19:40 参加者自己紹介

19:40~19:50 各学科の最新情報(介護支援コース、社会福祉学科学科)

19:50~20:25 グループディスカッション  
テーマ「介護現場に就職して感じていること~良いギャップ、悪いギャップ~」

グループワーク実施時には、数の不均等を整えるため、同意を得た卒業生数名に席を移動してもらい、テーマに沿って、40分のグループワークを実施した。各グループに教員が2名ずつ入り、1名が司会進行をおこない、もう一人が会話な内容を記録した。グループワーク終了後は、それぞれのグループでどのような話題が出たか発表をおこない、内容の共有化を図った。

各グループにお茶菓子を用意し、またテーブルクロスや植物を飾るなどして、堅苦しくならず話しやすい環境を大切にしたい。

20:25~20:30 アンケート記入 閉会

(5) 実践方法：実践は、介護福祉士国家試験対策準備特別委員会の委員を中心に、社会福祉学科学科長・専攻科長など、介護福祉関係科目を担当する教員9名がおこなった。

交流会終了後、参加した卒業生を対象に無記名でのアンケート調査を実施した。アンケートの質問項目は、先行研究で実施したアンケート調査の項目を参考に作成した<sup>(2)(3)</sup>。分析はSPSS19を使用した。また、グループディスカッションの記録はカテゴリーごとまとめ、考察をおこなった。

## 5. 倫理的配慮

交流会参加者に対し、アンケート調査およびグループディスカッションにおける記録の趣旨説明と共に、収集した情報は、個人が特定されない方法でデータ処理することを説明した。さらに、データの管理は、鍵のかかる大学研究室に保管をすることを伝えた。

## 6. 結果

(1) 「卒業生の交流会」の実践

小グループに分かれた席について自由な着席を促すと、親しい友人同士が集まり、不均等な数でグループができた。しかし同窓会のように久しぶりに会う教員や友人と近況報告をし合う様子が伺えた。教員に対しては、職場の様子と共に、学生時に学ぶべき内容や、職場の状況に対する相談などの話が聞く事ができた。

(2) アンケート結果(以下の小数点第二位は四捨五入)

①基本属性

アンケートの回収率は85.7%(18名)であった。

対象者の性別は、男性か2名(11.1%)、女性16名(88.9%)であった(図1)。年齢は20~24歳が最も多く8名(44.4%)で、次いで25~29歳が3名(16.7%)、

45～49歳と50～54歳がそれぞれ2名（11.1％）であった（図2）。卒業年度は、2014年度卒が最も多く14名（77.8％）で、2011年度卒が2名（11.1％）、2010年度卒と2005年度卒がそれぞれ1名（5.6％）であった（図3）。本学社会福祉学科では、離職者を対象とした職業訓練生も多く学んでいる関係で、最近の卒業年度であるにもかかわらず年齢が高い卒業生が、今回の交流会に多く参加している。

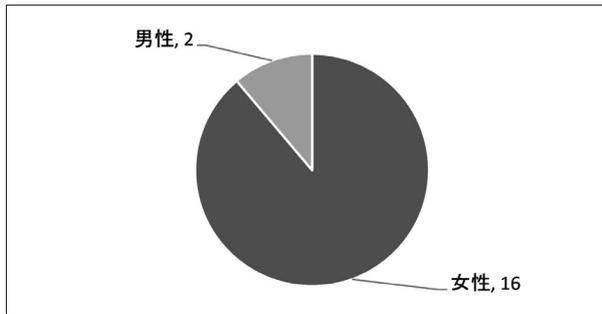


図1 アンケート回答者の属性：性別 N=18人

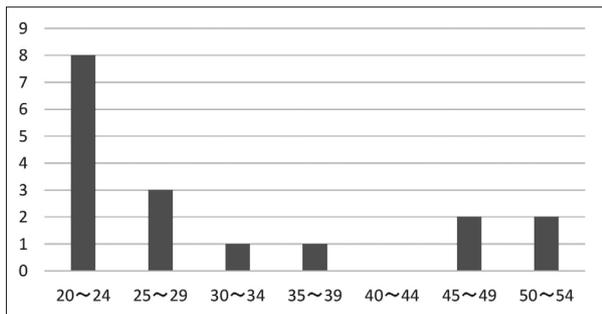


図2 アンケート回答者の属性：年齢 N=17人

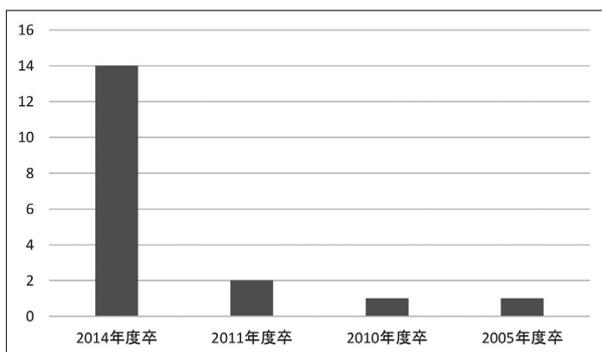


図3 アンケート回答者の属性：卒業生年度 N=18人

## ②「卒業生の交流会」参加しての感想

質問項目の『何を期待して今回参加しましたか』（複数回答）に対し、「教員との交流」12名（66.7％）が最も多く、次に「卒業生との交流」11名（61.1％）であった（図4）。理由について自由記述での回答は、「デイサービスなのでマンネリ化した生活に何かヒントが欲しかった」、「他の施設の様子をききたい」とのことであった。

また、「悩み相談」や「卒後教育」の項目に対する回答は一人もいなかった。『今回の参加した感想』は12名（70.6％）の方が「大変満足」または「満足」と回答し、「どちらでもない」は4名（25.0％）であった（表1）。「大変満足」、「満足」の理由について自由記述での回答では、「皆に会えた」、「楽しかった」など懐かしい友人や教員に出会ったことや、「色んな意見を聞くことができた」、「他の施設の良いところ、悪いところを聞くことができた」、「他の職場の方たちがどう思っているのか聞く事ができてよかった」など、職場に対する意見交換を満足の理由にあげられていた。逆に勤務先からの指示で参加した卒業生の『参加した感想』は、「どちらでもない」と答えている。

また、『卒業後、本学に期待すること』（複数回答）では、「交流の場」10名（55.6％）が最も多く、「最新情報の発信」5名（27.8％）、「福祉施設との連携」5名（27.8％）であった（図5）。

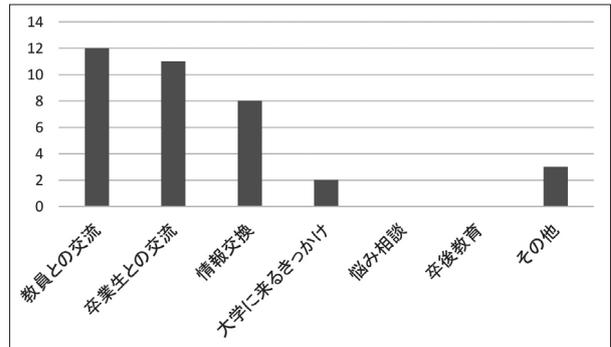


図4 何に期待して今回の交流会に参加しましたか（複数回答）

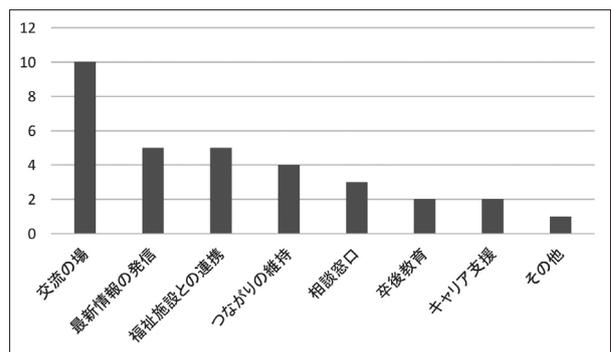


図5 卒業後、本学に期待することは何ですか（複数回答）

『「卒業生の集い」に参加した感想』と『年齢』、『卒業年度』のクロス集計では、『「卒業生の集い」に参加した感想』として「満足」と答えている人は、20～24歳が7名、25～29歳が2名で「満足」と返答した全体の90％を占めていた。また、「どちらでもない」と返答している5名（1名の年齢は不明）のうち、25～29歳と30～34歳、

表1 「『卒業生の集い』に参加した感想」と「年齢」「卒業年度」のクロス集計

		「卒業生の集い」に参加した感想			合 計
		大変満足	満足	どちらでもない	
年 齢	20～24歳	0	7	1	8
	25～29歳	0	2	1	3
	30～34歳	0	0	1	1
	35～39歳	1	0	0	1
	45～49歳	1	0	0	1
	50～54歳	0	1	1	2
合 計		2	10	4	16
卒 業 年 度	2014年度	2	9	2	13
	2011年度	0	0	2	2
	2010年度	0	1	0	1
	2005年度	0	0	1	1
	合 計	2	10	5	17

50～54歳それぞれ1名ずつの計3名が、「どちらでもない」の60%を占めていた。また卒業年度では、「大変満足」、「満足」と答えている12名のうち、2014年度卒者は11名(91.7%)を占めている。また「どちらでもない」と答えている5名のうち、2014年度卒者以外の人は3名(60%)であった(表1)。

『「卒業生の集い」に参加した感想』と『「卒業生の集い」に参加した理由(複数回答)』、『卒業生として本学に期待すること(複数回答)』のクロス集計では、『「卒業生の集い」に参加した感想』で「大変満足」、「満足」と答えた人は、『卒業生の集い』に対して「卒業生との交流」や「教員との交流」または「情報交換」を期待して参加した割合が高かった。しかし、『卒業生の交流会』の感想に対して「どちらでもない」と答えた5名が参加した理由は、「教員との交流」が3名(60%)、「情報交換」が2名(40%)であった。『卒業生として本学に期待すること』では、『卒業生の集い』の感想で「満足」と答えた10名のうち、「つながりの維持」4名(40%)、「交流の場」5名(50%)、「福祉施設との連携」4名(40%)が高い割合を示していた。また『卒業生の交流会』で「どちらでもない」と答えた5名では、「交流の場」4名(80%)の解答が高い割合であった(表2)。

『卒業年度』と『「卒業生の集い」に参加した理由(複数回答)』、『卒業生として本学に期待すること(複数回答)』のクロス集計のうち、『「卒業生の集い」に参加した理由』で「教員との交流」と答えた人は参加者全ての卒業年度で高い割合を示していた。それに対して卒業年度が2014年度のみ「卒業生との交流」11名(78.6%)と回答した人が多くいた。「卒業生として本学に期待すること」では、2014年度卒業生14名が、「つながりの維持」4名(28.6%)、「最新情報の発信」5名(35.7%)、「交流の場」8名(57.1%)であった(表3)。

『年齢』と『「卒業生の集い」に参加した理由(複数回

表2 「『卒業生の集い』に参加した感想」と「『卒業生の集い』に参加した理由(複数回答)」「卒業生として本学に期待すること(複数回答)」のクロス集計

		「卒業生の集い」に参加した感想		
		大変満足 (2名)	満足 (10名)	どちらでもない (5名)
「卒業生の集い」に参加した理由(複数回答)	卒業生との交流	2	7	1
	教員との交流	2	7	3
	情報交換	2	4	2
	大学に来るきっかけ	1	1	0
	その他	0	0	1
卒業生として本学に期待すること(複数回答)	相談窓口	0	2	1
	キャリア支援	0	2	0
	つながりの維持	0	4	0
	最新情報の発信	2	1	2
	卒後教育	1	1	0
	交流の場	1	5	4
	福祉施設との連携	0	4	1
	その他	0	1	0

表3 「卒業年度」と「『卒業生の集い』に参加した理由(複数回答)」「卒業生として本学に期待すること(複数回答)」のクロス集計

		卒業年度			
		2014年度 (14名)	2011年度 (2名)	2010年度 (1名)	2005年度 (1名)
「卒業生の集い」に参加した理由(複数回答)	卒業生との交流	11	0	0	0
	教員との交流	8	2	1	1
	情報交換	8	0	0	0
	大学に来るきっかけ	2	0	0	0
	その他	1	0	1	1
卒業生として本学に期待すること(複数回答)	相談窓口	2	0	1	0
	キャリア支援	2	0	0	0
	つながりの維持	4	0	0	0
	最新情報の発信	5	0	0	0
	卒後教育	2	2	0	0
	交流の場	8	0	0	0
	福祉施設との連携	5	0	0	0
その他	1	0	0	0	

答)』と『卒業生として本学に期待すること(複数回答)』のクロス集計のうち、『「卒業生の集い」に参加した理由』では、20～24歳の8名は、「卒業生との交流」6名(75%)、「教員との交流」5名(62.5%)を主な参加理由としてあげていた。35歳～39歳 45～49歳 50～54歳それぞれでは「卒業生との交流」「教員との交流」「情報効果」を主な参加理由としてあげていた。『卒業生として本学に期待すること』では、20～24歳の8名は主に、「つながりの維持」4名(50%)と「交流の場」5名(62.5%)と答えている。50～54歳の2名は主に「交流の場」2名(100%)と答えていた(表4)。

表4 「年齢」と「卒業生の集い」に参加した理由（複数回答）「卒業生として本学に期待すること（複数回答）」のクロス集計

		年 齢					
		20～24歳 (8名)	25～29歳 (3名)	30～34歳 (1名)	35～39歳 (1名)	45～49歳 (2名)	50～54歳 (2名)
理由 (複数回答) 「卒業生の集い」に参加した	卒業生との交流	6	0	0	1	2	2
	教員との交流	5	3	1	1	1	1
	情報交換	2	1	0	1	1	2
	大学に来るきっかけ	1	0	0	0	1	0
	その他	1	1	1	0	0	0
卒業生として本学に期待すること (複数回答)	相談窓口	1	1	0	0	0	1
	キャリア支援	2	0	0	0	0	0
	つながりの維持	4	0	0	0	0	0
	最新情報の発信	1	0	0	1	1	1
	卒後教育	0	0	0	0	1	1
	交流の場	5	1	0	1	0	2
	福祉施設との連携	3	1	0	0	0	0
	その他	1	0	0	0	0	0

### (3) グループディスカッション結果

グループディスカッションでは、それぞれの施設の状況について、情報交換を行う様子が多く確認された。各グループでテーマに対してフリーで話が進み、それを各グループに入った教員が記録をした。

記録した内容をカテゴリーごとにまとめた。『肯定的な情報』のカテゴリーは全部で22あり、サブカテゴリー『職員の対応』では、「介護スタッフも優しい言葉になる」や「利用者主体での介護をしている」など7つが挙げられた。また『介助方法』では、「入浴は個浴（ヒノキ風呂）30分」や「レク、機能訓練を担当決めてやっている」など5つが挙げられていた。

『職場での学び』のカテゴリーは全部で22あり、サブカテゴリー『仕事に対する思い』では、「介護士しかない」や「転職しても介護、親に学費を出してもらって、親からも続けなさいと言われていた（基本的に嫌いじゃない）」など10が挙げられた。また、『職場で学んだこと』では、「職場の人間関係が大切」や「ボディメカニクスは、お互いに負担なく、自分を守る、腰を守ることを実感し、真剣になった」など7つが挙げられていた。

『否定的な情報』のカテゴリーは29あり、サブカテゴリー『業務の不満』では、「休みなのに呼び出され、掃除をしなければならない」や「ボランティア精神で残業が多く、残業代がつかない」など13が挙げられた。また、『教育と現場のギャップ』では、「仕事のギャップがある」や「相手が大きく、変化を促すこともできない」など6つが挙げられていた（表5）。

## 7. 考 察

今回のニーズ調査は、8月に開催した「卒業生の交流会」に参加した18名を対象とした調査であるため、小数の限られた卒業生のニーズに留まっていた。初めての交流会に対して参加をした卒業生という点で、本学の取り組みに対して積極的な思いを持っている参加者の意見という見方も出来る一方で、卒業生全体の意見を踏まえているとは言い難く、卒業生のニーズ調査としては限定的な意見に留まっていた。そのため、卒業生全体のニーズ調査は今後の課題である。

### (1) アンケート結果について

参加した卒業生は図4に示したように、交流の場を求めて参加している人が多いことが伺えた。今回の参加者は、卒業して間もない2014年度卒者が多く、参加者全体の約77.8%を占めていたため、同級生同士の同窓会のような位置づけで参加をした可能性も考えられる。交流の内容については、表1の『交流会に参加した感想』の理由（自由記述）に記されていた「皆に会えた」、「色んな意見を聞くことができた」などの意見や、図5の『本学への期待』内容の結果から、同級生や教員との懐かしい顔ぶれとのふれ合いと共に、勤務先や介護内容に対する情報交換が期待されていたと考えられる。そのため、表1にあるように、『交流会の感想』で「どちらでもない」と答えていた人は、教員との交流を期待している部分が大きかったが、結果として十分な時間を確保することが出来なかったのではないかとと思われる。今回の交流会の内容は、卒業生の小グループの中に教員が1～2名つく中でのディスカッション形式でおこなったため、グループ内での情報交換は行うことができたが、多数の卒業生や教員とのふれ合いをおこなう場を設けることができなかったことが、アンケートの「どちらでもない」の結果に反映されたのではないかと考えられる。66.7%の卒業生が交流会に対して「満足」、「ほぼ満足」と答えていることから、交流会実施そのものは意義のある内容であったと評価できるが、実施方法については参加者が自由に移動するなど、実施方法を検討する必要がある。

また、交流会の感想で「どちらでもない」と答えた人は、表1および表2の結果より、年齢は比較的高く、また卒業1年目ではない経験年数の長い卒業生ほど、教員との交流や情報交換を求めていたといえる。『卒業生として大学に期待していること』の内容より、卒業生の中には交流や情報交換を期待しているも、卒業した時期や参加者の年齢、または介護に携わっている経験年数の違いに沿った「卒業生の交流会」の実践方法を検討することが必要といえる。

表5 グループディスカッション内容のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容
肯定的情報 (22)	利用者の情報 (3)	おしゃれな利用者が多い 一人とてもおしゃれな人がいるため、他の利用者もおしゃれな身なりをしていく お金持ちの利用者が多く、認知症であっても品はある
	職員の対応 (7)	介護スタッフも優しい言葉になる 利用者主体での介護をしている 入浴も個別化、一人一時間かかる人も尊重して、その人に合わせて介護している。 10人を1人で回せる 施設長の考え方が好き 共感できる 10年働けるエネルギー源 施設長として現場のことを知っている 結局、職員次第で→利用者の反応もちがう
	職員間の交流 (4)	現場で飲み会が多く、とても楽しい 職場結婚が多い すごく楽しい 先輩もとても優しい 職員同士が仲が良いので、大変なことがあっても何とかなっている
	介助方法 (5)	入浴は個浴 (ヒノキ風呂) 30分 レク、機能訓練を担当を決めてやっている 利用者の希望にあわせて入浴する。長い人で1時間(デイ) 定員20人 個別ケアが充実している
	教育と現場とのギャップ (3)	ギャップはない 学校で教えてもらったことを施設でも教えてもらった 利用者主体を感じた 実習では、自己決定や利用者主体といていたが、実際の実習現場は、職員主体であった。今の施設は、本当の意味で利用者主体
	教育と現場とのギャップ (6)	仕事のギャップがある。 訪問介護 (以前勤めていた) と今とはギャップが大きい (理念がないのでは?) 10年現場にいる同一法人で10年、はじめは介護を変えるぞ!!と意気込んでいたが、今は業務をこなす 相手が大きくて、変化を促すこともできない 実習現場は重度の方が多かった →自立度が高い人もいる 現場 介護保険知らなくてもできる
	業務の不満 (13)	休みなのに呼び出され、掃除をしなければならない ボランティア精神で残業が多く、残業代がつかない タイムカードを押す時間が決まっている 休憩がもらえない このケア体制では転倒が多い 仕事量が多く、負担が多い 日中、9人に2人体制 1人が掃除につくと、ケアをする人員が足りない 希望は、特養だったが、配属はショートで大変 ショートはデイサービスの特浴もやっている 法人内でサービス種別が違うのに、入浴など他のサービスの人のケアをやっている 小規模特養→職員が足りない 入浴などは、よく特浴を利用する→学校でも特浴とか機械操作を、もう少し慣れていた方がよい 職場で組むスタッフによって負担が違う
	職員への不満 (5)	1分おきに排尿を訴える利用者に対して、暴言をばくスタッフが1人いる 利用者の要望→影で言っていることあり 入社したら割り切らなくて早い立ち (2週間) 職場で組むスタッフによって負担が違う ユニットメンバーによって、利用者様 関係作り悪くなると辛い
	待遇への不満 (3)	10年前の給与と変化しない 他の資格を取るとか、生活や金銭面を考えると難しい 組織のあり方 人材が使い捨てになる
	周りの評価 (1)	知らない人には「よくそんな仕事をするな」と言われる
	離職 (1)	いろんなことからスタッフを集めると、いろんなやり方があり、もめて辞める
	否定的な情報 (29)	学校への要望 (3)
職場で学んだこと (7)		施設長 (先生) の 施設長の意見にある程度合わせて 職場の人間関係が大切 専門用語→聞いたことあるけど、詳しくない ボディメカニクス→お互いに負担なく 自分を守る 腰を守る 実感 真剣になった 胃ろうの人→何のために生きるとやろう 老人保健施設でユニットケア →やりにくさない ユニットは関係性が大切なので、移動は難しい
職場での学び (22)		介護士しかない 転職しても介護 学費を親に出してもらって、親からも続けなさいと言われる。(基本的に嫌じゃない) 嫌じゃないだけでない 友だちも介護の仕事している 悩み、話を交わせる
仕事に対する思い (10)		妊娠したらやめる→子ども手を離れたら→デイサービス かな・・・ 介護の仕事を目指すきっかけ 高卒で働きたい 介護の仕事を目指すきっかけ 祖母の介護を見ていて 介護の仕事を目指すきっかけ 部活で選んだ→実習先に行ってみて、こんな仕事があるんだ (勉強前と後のギャップ) 入職したころは施設長に共感し、ついていきたいと思っていたが、辞められた時に迷ったが、自分のしたいことを続けられている 毎日、実践を重ねて上手くなっている実感 →「先輩 その内マヒしてくるよ」
その他 (2)		困ったことは別れない 職場婚が多い

## (2) グループディスカッション結果について

グループワークでは、現場での魅力的な取り組みや工夫など、肯定的情報として具体的な情報交換がされていた。これらは参加者の前向きな意見交換につながったことが伺えた。また、養成校を卒業し介護現場に勤務したことで、これまで養成校で学んだ意味や期待などが確認された。これらは、卒業生が養成校に求める卒後教育の具体的なニーズの抽出に繋がるといえる。

現場に対する否定的な内容は、ディスカッションのカテゴリーとしては最も多く挙がっていた。これは、職場に対する不満のはげ口として、今回の交流会が機能していたことが伺えた。職場の不満について、同級生と共有することは、意欲向上にも繋がるといえるため、重要な取り組みの一つとも考えられる。

## (3) 卒後教育を母校が担う意義

介護福祉士の取得方法は実務経験ルートと養成校卒業ルートがあるが、その違いについて高野恵子は「母校があること」としている。母校の教育資源には「人的資源と物的資源が挙げられる。人的資源は教職員、物的資源は母校の図書館の利用や物品・設備の活用など」がある<sup>(4)</sup>。介護の仕事は生活という多面性の高い部分を専門領域としているため、個性性が高い。しかし、人材不足の現状にある介護現場では、人材育成の体制が整っているとはいえない。そのため、養成校である母校の教員や図書館などの資源は、卒業生が抱える悩みや求めている情報を得るのに有効な環境にあるといえる。さらに、卒業生が抱く課題が解決できる可能性によって介護人材確保に繋がると考えられる。

養成校における卒後教育実践によって期待される可能性の1つとして、根拠に基づいた学びによって資格取得ができ、基礎的な能力が時間をかけて養われることがあげられる。さらに卒業後には、養成校が母校として資格取得後のフォローを担う機能となることは、介護職の専門的技術・知識の向上につながると共に、卒業生同士の連携による仲間意識によって、介護現場で継続して勤務できる意欲に繋がることが期待される。介護の仕事は対人援助であるため、広い視野を持ち得る人材が必要な職業である。そのため、人間形成と共に専門的視点を踏まえた介護福祉士を育成するためにも養成校の存在は重要といえる。さらに資格取得後のフォローを担うことによって、介護現場の質の向上に繋がる。そのために、卒業後の継続した教育による人材育成を進めることも養成校の重要な役割の一つだと考えることができる。

介護現場に勤務する職員が抱く「労働条件・仕事の負担についての悩み・不安・不満」について、岐阜県社会福祉協議会 岐阜県福祉人材総合対策センター『平成26年度 介護サービス事業所等の現状調査〔結果報告書〕』によると、「人手不足・職員の入れ替わりが多く忙しい」や「仕事内容・保有資格のわりに給与・賃金が高い」、

また「体力や健康面に不安がある」などが高い割合を占めているが、「研修などのスキルアップ支援が少ない」や「上司や同僚とのコミュニケーションが取りづらい・相談相手がいない」が居宅系では、それぞれ12.2%と11.9%、施設系では、10.3%と14.2%と一定数の職員が、職場内でのスキルアップ体制や相談先に対して不満や不安を抱えていることが確認される<sup>(5)</sup>。こうした面についても、卒業生に対して母校としての役割を果たし、また卒後教育を体系的に実施することができれば、改善につながる可能性があると考えられる。

卒後教育について高橋らは、「本来、職能団体が中心になって組織的に実践していくことが必要」と指摘している。しかし「歴史の浅い介護福祉士の職能団体の組織率は未だ低く、さらに社会的評価や条件整備も適切とはいえない」<sup>(2)</sup>と述べている。これは岐阜県でも例外ではないため、卒後教育を実施するため介護福祉士養成校の役割は重要といえる。

## (4) 介護福祉の社会的役割

介護現場に勤務する介護職は、個性性の高い利用者に対し、それぞれに独自の工夫をしながら実践を行っている。そこから生まれる疑問や課題の解決について、本学の卒後教育への実践が悩み解消に導く役割を担うことが期待される。それは同時に介護現場の発展に繋がる取り組みとして考えられる。将来的には、卒業生が介護現場での実践を実践研究として社会に発信できる力を身につけることや研究の取り組みや学会発表など、多忙な介護現場で勤務する職員には取り組み難しい分野といえるが、研究機関でもある大学との連携が密になれば、研究実践のサポートを担うことも可能となる。

厚生労働省の調査によると、要介護者（要支援者）の数は、2013年3月末時点の561万人から、2014年3月末には584万人と、約4%の増加の状況にある<sup>(11)</sup>。その中で、40～50歳代の働き盛りの世代が介護を理由に離職をせざるを得ない、いわゆる「介護離職」が2013年には93,000人といわれ大きな社会問題となっている<sup>(12)</sup>。その反面、介護人材の不足は解消されておらず、介護福祉施設が増床されても働き手の介護人材が確保できず、空きベッドを活用できない現場が増えている矛盾が生じている<sup>(13)</sup>。このような社会状況のため、介護業務は重要な社会的役割を担っており、それだけに、質の高い介護業務を実施する環境を構築することは仕事に対するやり甲斐に繋がることが期待される。その意味でも今回の取り組みを継続していくことは、意義のあるものといえる。

## (5) 今後の課題

今後、この卒後教育事業を継続していく上での課題は、これまで①卒業生との連携が保たれていなかったことを反省し、②変更された連絡先の把握に努め、③全ての卒業生と連絡を取る手段を構築し、全卒業生のニーズ

抽出を目指す。また、本取り組みが人材育成および人材確保に繋がるか否か、今後の追跡評価が必要となるが、こうした取り組みを通じ、介護福祉士養成校としての本学の体系化された卒後教育の体制を目指していきたい。

## 8. おわりに

この取り組みにより抽出した参加者のニーズから、介護人材育成に対する母校として求められている役割の内容が確認された。今後も「卒業生の交流会」を継続的に開催し、その都度、参加者からニーズ調査をおこなうことで、介護現場に勤務する卒業生の要望を把握に努め、意欲を持って継続的に勤務することにつながる卒後教育の内容を構築していく必要がある。また「交流会」を通して、本学卒業生の横のつながりと共に、卒業生だけではなく、施設で勤務する人のニーズを把握することで、岐阜県の介護現場の活性化につながることを期待できる。

## 謝 辞

今回の「卒業生の集い」実践において、短期大学部学長を始め、人間福祉学部学部長および社会福祉学科学科長・専攻科長のご理解と頂くと共に、介護福祉士国家試験対策委員の先生方、その他、協力頂いた先生方に感謝を申し上げます。有り難うございました。

## 引用 参考文献

- (1) 厚生労働省：2025年に向けた介護人材にかかる需給推計（確定値）について，[www.mhlw.go.jp](http://www.mhlw.go.jp)，平成27年6月24日閲覧
- (2) 高橋美岐子，藤沢緑子 ほか：日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科卒業生の在学中の学業への取り組み，教育・学生生活に対する満足度，および卒後の自己啓発－卒業生の動向調査から（その1）－，日本赤十字秋田短期大学紀要 第12号，61-71（2007）

- (3) 浜崎真美，庵木清子，古川恵子：介護福祉士養成課程の卒後教育と教育課程について－卒業生への追跡調査と通じて－，鹿児島女子短期大学紀要 第50号，89-99（2015）
- (4) 高野恵子：介護福祉士養成と卒後教育の在り方，甲子園短期大学紀要29，52-57（2010）
- (5) 岐阜県・岐阜県社会福祉協議会・岐阜県福祉人材総合対策センター：平成26年度介護サービス事業所等の現状調査【結果報告書】，52-53（2015年3月）
- (6) 高野晃伸：介護人材講座 146 介護人材育のための養成校の役割と可能性，地域ケアリング Vol17，No11，30-35（2015）
- (7) 千草篤磨：介護人材講座 第142 介護人材育成における養成校と介護現場と連携とその役割，地域ケアリング Vol17 No6，30-34（2015）
- (8) 上原千寿子：特集4 介護福祉士の存在意義と養成施設の役割，地域ケアリング Vol17，No8，30-36（2015）
- (9) 中寫洋：介護福祉職の専門化に関する一考察－介護福祉士養成の視点から－，介護福祉学 第12巻，第1号，29-40（2005）
- (10) 浜崎真美，庵木清子，古川恵子：介護福祉士養成課程の卒後教育と教育課程について－卒業生への追跡調査を通じて－鹿児島女子短期大学紀要50，89-99（2015）
- (11) 厚生労働省：平成25年度 介護保険事業状況報告書 結果の概要，[www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/toukei/joukyou.html](http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/toukei/joukyou.html)，2016年1月閲覧
- (12) 日本経済新聞 夕刊：介護離職を防ぐには，2015年2月2日
- (13) 読売新聞 朝刊：特養増設 期待と不安，2015年9月25日